

円筒埴輪棺

埴輪は、古墳の周囲に並べられた素焼きの土製品です。その種類には、人物や馬・鶏などの動物、家や舟などをかたどった形象埴輪と、筒形の円筒埴輪があります。

通常、埴輪は、地方豪族などの有力者の墓であるとされる古墳を祀り飾るものとして使われますが、埴輪棺は、埴輪自体を棺として利用し、遺体を埋葬したものです。

円筒埴輪には、口縁部分がラッパのように大きく開く「朝顔形」円筒埴輪と、土管状の「普通」円筒埴輪があり、「透孔」と呼ばれる円形や三角形の孔が開けられています。

今回の円筒埴輪棺は、完形の普通円筒埴輪2つを入れ子状にし、楕円形の土坑の中に横に寝かされた形で出土しました。その口や底、透孔の部分は円筒埴輪の欠片で蓋がされています。

この円筒埴輪は胎土の特徴から、出土地点から南に9 km ほど離れた場所にある小幡北山埴輪製作遺跡（茨城町）産のものであり、5世紀末から6世紀初頭につくられたものと推測されます。

埴輪棺墓の被葬者については、棺の大きさから、成人をそのまま埋葬することは難しいことから、子供を埋葬したものとする説があります。また、埴輪棺は通常、古墳に伴って作られることが多いことから、古墳の被葬者に仕えた臣下の墓とする説、さらに、埴輪を製作した工人の墓であるという説があります。

今回の円筒埴輪棺は、鯉淵町にある後原西遺跡の調査で出土したもので、水戸市内では初めての発見になります。先に述べたように、通常は古墳に伴うものとして作られますが、現在のところ、周辺に古墳は確認されていないことから、今後の調査がまたれるところです。

おわりに

考古学という学問は、資料などから読み取った情報をもとに、過去の営みを探る物証史学です。そのため、むかしの人々の生活様式や政治活動など、形として残る分野に関しては比較的うかがい知れます。しかし一方で、精神世界などの「形のないもの」を捉える分野に関しては不得意です。特に、文字が存在しない先史時代の文化や、あえて文字化されず後継者に「口伝」でのみ伝えられてきた知識に関しては、考古学の調査だけでは、それらを知ることには限界があることも確かです。

考古学からこれら「かたちのないもの」へのアプローチとしては、この課題を踏まえて、これまでに蓄積された膨大な調査事例を整理・分類しつつ、宗教学や民俗学など、他の学問の研究成果とあわせて、儀礼の復元が試みられています。

さて、今回の企画展では、水戸市内の遺跡でみつかった縄文時代から近代にかけての各種の「あやしいどうぐ」を展示しました。この展示がみなさんにとっての、むかしの人々の人智の及ばないものへの畏れと祈り、ささやかな願い、病や死に対する恐れなど、現代の私たちにも通じる気持ちの部分に思いを馳せるきっかけとなりましたら幸いです。

協力

(敬称略)

瓦吹 堅、公益財団法人茨城県教育財団、常陸大宮市教育委員会、ひたちなか市教育委員会

参考文献

大平 茂 2008 『祭祀考古学の研究』 雄山閣
加藤晋平・小林達雄・藤本 強 編 1983 『縄文文化の研究 第9巻 縄文人の精神文化』 雄山閣
瓦吹 堅 1991 「水戸市金洗沢遺跡の土偶」『茨城県立歴史館報 第18号』 茨城県立歴史館
小林達雄 編 1988 『古代史復元3 縄文人の道具』 講談社
狭川真一 2009 『中世墓の変遷と火葬の受容』 奈良大学大学院博士学位論文
関口慶久 2004 「江戸の地鎮と埋納」江戸遺跡研究会編『江戸の祈り—信仰と願望—』 吉川弘文館
取手市教育委員会 編 1978 『市之代古墳群第3号墳調査報告』

令和4年度水戸市埋蔵文化財センター企画展
あやしいどうぐ～発掘された祈りの世界～
令和4（2022）年10月29日 発行

編集 水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター
〒311-1114 水戸市塩崎町1064-1 TEL 029-269-5090
発行 水戸市教育委員会
印刷 (社福)水戸市社会福祉協議会 水戸市身体障害者就労支援施設のぞみ



円筒埴輪棺
(後原西遺跡出土)

おぼたきたやまほにわせいさく



令和4年度水戸市埋蔵文化財センター企画展

あやしいどうぐ
～発掘された祈りの世界～

展示解説シート



ごあいさつ

古墳や城跡、住居跡などの遺構。土器や石器などの遺物。これらの考古資料からむかしの人々の暮らしを探る発掘調査では、稀に、今を生きる私たちにはどのように使われていたかわからない「あやしいどうぐ」が出土することがあります。神や仏、精霊などの目に見えない存在を強く信じたむかしの人々は、畏れながらも崇拜する中で、その力にあやかるために、「あやしいどうぐ」を使い、「まじない」や「まつり」などの呪術的な儀式を行っていたようです。

また、むかしの墓地から出土する考古資料からは、これまでの研究により時代ごとの「とむらい」のかたちが明らかにされつつあります。そこからは、亡き人への哀悼や再生への願い、死後の世界での安寧など、現代よりも死が身近だった時代の祈りの姿がうかがえます。

この企画展では、「まじない」「まつり」「とむらい」をテーマに、水戸市内の遺跡から発掘された遺構や遺物を通して、むかしの人々の祈りの世界をご紹介します。

最後になります。本企画展開催に際し、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に心から御礼申し上げます。

呪〜まじない〜

「呪」という文字だけをみると、藁人形に釘を打ち込む「丑の刻参り」のような、何か恐ろしい儀式を行うことを想像する方も多いのではないのでしょうか。

たしかに、「呪」という文字には他人に災いが降りかかるように願うことを意味する「呪い（のろい）」という読み方もありますが、神秘的な力に人間側から干渉し、災禍を逃れたり、起したりするための「呪い（まじない）」という意味もあります。

近頃、一躍有名になった妖怪「アマビエ」ですが、その絵を身につけることも「まじない」の一種といえるでしょう。「まじない」は迷信と言われる一方、現代においても災いに対する対抗策として、日本人の生活の中に確かに息づいていることがわかります。

では、日本で「まじない」を含む呪術的な行為が始まったのは、いつからなののでしょうか。

ここでは、縄文時代の原始的な「まじない」の道具である土偶をはじめ、古代のカマド鎮めの儀式、近代の子供の出世を祈った痕跡などを展示し、「生活を良くしよう」「大切な者を守ろう」とする祈りが込められた遺物をご紹介します。

土偶

「まじない」の歴史は、太古の昔、私たちの祖先が自然と共存していた頃に始まります。自然は豊かな恵みを人々に与える一方、時に簡単に命を奪う理不尽な存在でもあります。縄文時代の人々は、その絶対的な自然の力の中に神や精霊の存在を感じ、原始的な宗教である自然崇拜（アニミズム）を生み出したといわれています。そして、その神秘的な力にあやかり、豊穡や安産などを祈るため用いられたと考えられているのが、土偶や石棒・石剣です。

土偶は、縄文時代早期から晩期まで存在する縄文文化を代表する道具です。また、土偶は、そのほとんどが女性を、特に、大きな乳房と張り出した腹部をもつ妊婦の姿をかたどっています。そのため、新しい命を生み出す豊穡の女神（地母神）として祀られていたとする説があります。また、出土する土偶のほぼすべてが、どこかしらの部位に欠損がみられることから、病などの悪いものを移すための「人形」として故意に破壊することで出産の無事を願ったともいわれています。

今回展示している土偶は、昭和 49 年に水戸市全隈町の丘陵上にある金洗沢遺跡から出土したものです。この調査だけで 97 点の土偶と 4 点の土版が出土していて、土偶はハート形土偶、山形土偶、木菟土偶、遮光器土偶、X 字形土偶などに分類できます。金洗沢遺跡は、縄文時代中期から晩期にかけての集落遺跡ですが、その中で、山形土偶が 75 点と最も多く出土していることから、後期中葉に土偶の祭祀が盛んに行われたことがわかります。



『肥後国海中の怪（アマビエの図）』（京都大学附属図書館所蔵）Photograph courtesy of the Main Library, Kyoto University – Amabie



土偶（金洗沢遺跡出土）個人蔵

祀〜まつり〜

律令制度が始まる以前の日本の祭祀は、集落もしくは個人としての日本古来の神（＝自然）への崇拜を主としたものでした。しかし、645 年の大化の改新以降、7 世紀末頃には日本は律令国家として成立期を迎えたといわれ、信仰面においても、大規模な転換期となります。この時期には国内の様々なことが整備されていき、祭祀行為も 8 世紀初頭に完成した「大宝律令」により規定され、天皇の絶対的地位を確立するための政策として国家的な祭祀が行われるようになります。

その具体的な内容は、10 世紀に成立した「延喜式」の中で確認でき、従来の祭祀に大陸からもたらされた道教などの新しい文化が加わり、土馬や人形、人面墨書土器など、多様化がみられます。このような国家的な祭祀はやがて地方の官衙（役所）にも広まり、さらに地方官衙から周辺の集落へと伝播して行なわれるようになったようです。

また、仏教の伝来による古代祭祀への影響も看過できません。日本に仏教が伝わったのは 6 世紀頃のことと言われています。当時の日本は華やかな天平文化の裏側で、地震や天災・天然痘等の疫病の流行といった災いにみまわれていました。そのため、741 年、聖武天皇により、国分寺造立の詔が出され、諸国に国分寺を造営することで仏教により国を鎮めようとする鎮護国家の実現を目指すこととなります。

人面墨書土器

人面墨書土器は、奈良・平安時代にみられるもので、まじないのために甕や坏などの土器に墨で人の顔を描いたものです。当時、天然痘などの疫病の大流行により、都を中心に甚大な被害がでていました。古代の人々は、恐ろしい疫病を、神や鬼などの「得体のしれない何か」によるものと考えたのでしょう。そのため、厄災を運んでくる疫病神や鬼神の顔を描いた甕に病人が息を吹き込むことで体にたまった穢れを封じ込め、川や溝などに流し祓ったといわれています。

人面墨書土器は、平城京跡や平安京跡などで多数出土しており、地方に派遣された役人たちにより、都の外へと広がったと推測されています。水戸市内では、大塚町と堀町、大串町の 3 例が見つかっています。堀町と大串町には、古代の役所に関連すると考えられている集落や施設がそれぞれ確認されていますが、大塚町でも人面墨書土器が出土したことで、この土地にも役所関連施設や古代の官道などが存在する可能性がでてきました。

帛〜とむらい〜

医学・科学が発達していなかった時代、「死」という、避けられない現象にむかしの人々はどのように向き合っていたのでしょうか。

日本列島のほとんどの地域は、火山灰が堆積した酸性土壌のため、骨などが残りにくい性質をもちます。そのため、古い時代の骨が良好に残る遺跡は、アルカリ性の貝が酸性土壌を中和させる貝塚や、骨が空気に触れにくい古墳、または低湿地など、自然環境や保存条件がそろったものに限られます。このことから、「墓」と認定するためには、人骨の有無だけでなく、遺構の形状や副葬品と思われる遺物の出土など、様々な状況を把握する必要があります。

日本の葬送の歴史で最も古い事例は、旧石器時代の墓と思われる遺構ですが、沖縄や北海道などのごく一部でのみ発見されています。現在のところ、明確に墓の痕跡が確認できるようになるのは、定住が始まった縄文時代からです。

縄文時代には、地面に楕円形の穴を掘り、そこに遺体を土葬する土壙墓を主体とします。弥生時代になると、土壙墓のほか、東日本特有の再葬墓などがみられ、弥生時代後期には墓の周りに溝を掘って墓域を区切る方形周溝墓がつくられました。その方形周溝墓は、やがて豪族たち有力者のための古墳へと引き継がれていきます。

古代には、これまでの土葬のほか、水葬、風葬など、身分や貧富の差によって多様な葬送が行われました。また、奈良時代には、700 年の僧道昭の火葬をはじめ、持統天皇が火葬されたことをきっかけとして、貴族、そして地方の役人に火葬が浸透していきます。その後、平安時代末期から鎌倉時代にかけて極楽往生を願う浄土信仰の教えが広まると五輪塔や板碑といった供養塔が建てられ、追善供養や自身のために生前に行う逆修供養が行われるようになります。